

## 春のアブラゼミ 第9日目 「ETの法則」②

組 ( ) 番号 ( ) 氏名 ( )

No doubt throughout all past time there actually occurred a series of events which constitutes history in some ultimate sense. Nevertheless, much the greater part of these events we can know nothing about, not even that they occurred; many of them we can know only imperfectly; and even the few events that we think we know for sure we can never be absolutely certain of, since we can never revive them, never observe or test them directly.

全訳しなさい。特に、下線部に注意して和訳しなさい。

和訳

---

---

---

---

---

---

---

---

---

---

### 英文の読み方

1. 前置詞＋名詞は他の部分から切り分けて形容詞か副詞かを考える。
2. and、but、or が出てきたら直後に注目し、直前に同じ形を探す。
3. a、an、the が出てきたら名詞を探す。
4. 助動詞の後ろには動詞がある。be～to や～to を助動詞考えれば簡単に動詞が見つかる。
5. 文中副詞の後ろには(一般)動詞がある。文中副詞のほとんどが「-ly」の形をしている。
6. 文頭に前置詞＋名詞があり、その直後に動詞があれば、完全逆転型の倒置。
7. 文頭に否定語があり、直後が疑問文の並び方なら、疑問文型の倒置。
8. 省略は「同形反復」に注目すればすぐ分かる。
9. A of B が出てきたら「BがAする」「BをAする」「Bの持つA」「BというA」「AのB」を特定する。
10. that、-ing、to-が出てきたら「名詞」「形容詞」「副詞」を特定する。、-ing のコンマ(,)の省略に注意。

### 注意点

no doubt は文頭副詞。throughout all the past も「前置詞＋名詞」の副詞。その後ろの there も当然副詞。その次に来ているのが actually occurred の動詞だから、これは前にやった「主語＋動詞＋文末副詞」を逆転させて「文頭副詞＋動詞＋主語」の順にした「完全逆転型」の倒置だと気づくかどうかポイント。

でも、これは今回の最重要ポイントじゃない！今回のポイントは、第2文の主語は何だか分かるかどうかです。much the greater part of these events じゃないんだよ。これが分からないと、後半がさっぱり分からないはず。さらに、下線部は文の構成要素が全部そろっていないよね。つまり、ブリブリ省略されているわけです。さて、何が省略されているか分かる？

この英語はディケンズか書いたような、とてもカッコイイ英語です。でも、とっても読みにくくて、何が書いてあるのか分からないよね。何か変だなと思ったら、「倒置」「省略」「挿入」を疑ってごらん。ここで用いられている技法はすべて「倒置」です。「完全逆転型」だけでなく「一部逆転型」が多用されているのに気づくかな？！

この英文和訳のポイントは、今までに勉強した「文頭に前置詞＋名詞があり、その直後に動詞があれば、完全逆転型の倒置」の応用パターンと、強調したいモノだけを文頭に出す「一部逆転型の倒置」です。

「完全逆転型の倒置」と「E Tの法則」は目的が同じです。つまり、頭でっかちのE T型の英文の安定を良くするために、語順を完全に逆にするわけです。次の見取り図を見れば、この英文がE T型であることが一目瞭然ですね。

no doubt (=probably) throughout all past time			
a series of events	actually occurred	there	
主	どうした		

which constitutes history in some ultimate sense

there がなぜこんなところにあるのか分からない子がいると思います。でも、これって中学の時に習った there なのですよ！

A book	is	there . . . . → There is a book.
主	ある	

there や here には相手の注意、注目を惹きつけるという役割があります。そこで、「主語＋動詞＋文末副詞」の順序を完全に逆転させて、there から文を始めます。それが There is a book です。この中学の時の there と問題文の there とを良く見比べれば、まったく同じ構造をしているのが分かるはずです。と言うことは、次のように言えます。

- ・ 文頭にある「前置詞＋名詞」の直後に動詞が来れば、完全逆転型の倒置
- ・ there の直後に動詞が来れば、完全逆転型の倒置

文頭副詞の次には、普通は「主語＋動詞」が来るはずなのですが、その「主語」をすっ飛ばして「動詞」が来てれば「完全逆転型の倒置」じゃないかと考えるようにしてください。だって「前置詞＋名詞」も there も両方とも副詞ですからね。

さて次に、「一部逆転型の倒置」について復習しておきましょう。

■彼は若いんだけど、お金がある。  
As he is young, he is rich. (before)  
.....↓  
Young as he is, he is rich. (after)

倒置前と倒置後を比べてみると、young だけが文頭に出てきているのがわかります。この様に、強調したい部分だけを文頭に出すような倒置を「一部逆転型」と呼んでます。あ、藪下が勝手にそう呼んでいるだけです。as には「ので、とき、ように、つれて、しながら、なのだが、比較、資格、関係代名詞」の9つの用法がありましたね。この例文の as は「なのだが」の譲歩です。though と同じ意味なのですが、as を使うと一部逆転型の倒置が起こります。なぜかという、as には9つも意味があるので、ぱっと見ただけではどの意味だか分からない。そこで、一部逆転型にしてやれば「なのだが」の意味だと一目で分かるようになるのです。では、これと第2文とを比べてみましょう。

■僕らはその出来事のずっと多くの部分について、何も知ることなどできないのだ。  
We can know nothing about much the greater part of these events. (before)  
.....↓  
Much the greater part of these events we can know nothing about. (after)

赤い部分が強調のために文頭に出てきている「一部逆転型」の倒置です。much は「比較級を強調する much」で「はるかに」とか「ずっと」の意味を比較級に加えます。

次に、下線部の省略を考えてみましょう。まず、代名詞化された they ですが、その段落のテーマが代名詞化されるって覚えてましたか？そして、具体的にそれが何かを探すには、鉛筆を they に突き立てて逆送させ、名詞の複数形が出てきたらそれを代入して確認する！でしたね。最初にヒットするのが these events で、もう少しさかのぼると a series of events が出てきて、which がそれを飾っていますね。この events は2度繰り返されているし、2つ目の events には承前語句の these もついているので、とても大切な表現だと分かります。だから、この events がテーマだと分かります。以上から、they は「歴史を構成する一連の出来事」だと分かります。

さて、1度書いたので、2度目は同じ形の繰り返しを避けるために省略します。つまり、省略は「同形反復」に注目すればすぐに分かります。だから、省略があるな！と思ったら、省略文と直前の文とを重ねてやって良く観察します。こんな具合です。

- ・ much the greater part of these events we can not know anything about.
- ・ even that they occurred we can not know.

not any = not は中学生レベルの書き換えですよ！それを頭に置いて考えると、青い部分が繰り返されていると分かります。ということは、この省略文も「一部逆転型」の倒置で、さらにその上省略まであるわけです。気がついたかな？！このことに気がついたとしたら、君の英語力はなかなかのモノです。

<見取図>

・ No doubt throughout all past time there actually occurred a series of events which constitutes history in some ultimate sense.

No doubt(=probably)  
throughout all past time

a series of events	actually occurred	there
主	どうした	

which constitutes history in some ultimate sense

- \* no doubt = たぶん、きっと
- \* throughout A = 「Aを通してずっと」
- \* past time = 「過去」「過去の時代」
- \* a series of A = 「一連のA」
- \* in a sense で「ある意味で」。in some ultimate sense なら「根本的な意味で」。

【全訳例】過去の全ての時代を通して、根本的な意味で、歴史を構成する一連の出来事が実際に起こったことは間違いない。

・ Nevertheless, much the greater part of these events we can know nothing about, not even that they occurred;

Nevertheless

we	can know	nothing	about much the greater part of these events
主	知っている	何を	

we	can not know	even that they occurred
主	知らない	何を

- \* much は「比較級を強調する much」
- \* great part of A で「Aの大きな部分」
- \* these events の these は承前語句。前文の which 以下を指している。
- \* that はことシリーズ。「それらが起こったということ」の意味。

【全訳例】それにもかかわらず、僕らはその出来事のはるかに多くの部分について何も知ることなどできないし、その出来事が起こったことすら知ることができないのである。

・ many of them we can know only imperfectly;

we	can know	many of them	only imperfectly
主	知っている	何を	

\* これも完全逆転型の倒置。でも、今度はすぐに分かるよね。

【全訳例】僕らはその出来事の中の多くを不完全にしか知ることができない。

・ and even the few events that we think we know for sure we can never be absolutely certain of, since we can never revive them, never observe or test them directly.

and

we	can never be absolutely certain of	even the few events
主	確信が持てない	何に

that we think we know for sure

- \* be certain of A で「Aを確信している」。be certain of 3語で1つの他動詞として覚えると使いやすい。
- \* for sure で「疑いの余地なく」「間違いなく」。
- \* that は直後に不完全文 (we know ×) が来ているので、関係代名詞。

【全訳例】僕らは確実に知っていると思う数少ない出来事についても、絶対に起こったと確信を持つことなど不可能なのである。

since	we	can never revive	them	directly
		can never observe	them	
		or test	them	
	主	どうした	何を	

- \* since は接続詞で「なぜなら」。
- \* revive で「復活させる」。ここでは「歴史上の出来事を再現する」。
- \* them はこの段落を通してすべて events。

【全訳例】なぜならその出来事を再現したり、直接目で見たり調べたりすることなど決してできないからである。